

---

# 【横滑りの無い人生なんて】

鵜野森鴉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【横滑りの無い人生なんて】

### 【Nコード】

N6769G

### 【作者名】

鵜野森鴉

### 【あらすじ】

ドリフト大好き小僧だったあの頃。今、オジサンになって思うこととは。走り屋君に送る応援メッセージ。

この物語はフィクションです。

登場する人物・施設等は全て架空のもので、実存するものとは何ら関係ありません。

実際の運転は、マナーを守り安全運転を心掛けましょう。

【横滑りの無い人生なんて】

童話「金太郎」の故郷にある峠。

昼間は富士山がキレイに見える、絶好のハイキングコースが有名である。

黄昏時から宵のうちは、小田原市街の夜景が美しいデートスポットだ。

だが、日付が変わる頃から夜明けまでは、メジャーな峠デビューを控えた、

いわゆる走り屋予備軍の練習の場になっていた。

昼間、観光客を搬送するために、路線バスが通るこの峠は、道幅も広くて、

ドリフトの練習には持って来いの場所だった。

かくいう俺も、この峠でスピンターンとサイドドリフトの習得に勤しんだ。

土曜の深夜は台数も多く、練習するにも順番待ちが必要だったので俺は

もっぱら金曜の夜に走っていた。

直線である程度までスピードを上げる。

ブレーキングして荷重をフロントタイヤに載せ、ステアリングを切る。

車体にヨーが発生したら、サイドブレーキを引く。

そのまま180度回転するのがスピターン。

サイドブレーキを引くまでは同じで、リヤタイヤがブレークしたらサイド

ブレーキを戻して、アクセルでリヤタイヤの空転量を調整しながら、カウ

ンターをあてつつ、コーナーの曲率に合わせて走るのがサイドドリフトだ。

言葉で表すとたったコレだけの事が、実際にはなかなか上手く行かない。

途中でスライドが止まってしまったり、逆にスライド量が多すぎてスピン

してしまったりと、下手糞の手本のようだった。

偶然に一回出来ても、自分のモノにしていけないので、再現性がない。何度も何度も繰り返し練習して、やっと満足に出来るようになったのが、

通い始めて3ヶ月も経とうかという頃だった。

そんなチンケな小手先のテクニックでも、キマると嬉しくて峠だけでなく、

チャンスがあれば、街中でもバンバン試した。

ある程度のドリフトが出来るようになると、ついにメジャーな峠デビュー

を果たす事になる。

俺のデビューは、県境にある 峠だった。

この峠は、週末でも台数があまり多くなく、それなりのルールが存在して

いたので、ルーキーでも走りやすかった。

ルールは到って簡単で、そこを走る場合は、一列に連なって上りは上り、

下りは下りで、全車が一方通行で走る。

最後尾の車がUターン区域でパッシングやクラクションを鳴らすと、先頭

の車が走り出し、後続はそれに続くというシステムだった。

深夜の奥深い山なので、一般車の通行は皆無に近いから、失敗して車線を

割っても、対向車と接触する恐れはまずない。

マナー？の良さは、箱根の有名なドリフトスポットとは雲泥の差だ。何度かギャラリーに行き、デビューはここで決めていた。

安っぽいバケットシートに身を沈め、中古の4点式シートベルトを締めて、

すぐごと隊列に加わる。

先頭から順番に、等間隔で走り出す。

前車がスタートした。

俺もギヤをローに入れ、クラッチを繋いで走り出した。

セカンドにシフトアップしてすぐ、最初のコーナーに差し掛かる。

もう身体に染み付いたドリフト時の動作。

頭で考えなくても、身体が勝手に動いてくれる。

景色が横に流れ、エンジンの唸りとタイヤのスキール音だけが聞こえる。

一度リアをブレークさせてしまえば、後はアクセルとブレーキを調節して

右に左に振りっ返す。

「楽しいー！、超たのしいー！！」

当時は、ドリフトしている時が至福の時間だった。

夜通し走って、俺も車も空腹になる頃、空が白んでくる。

1台、また1台と家路に着く。

シャワーで汗を流し、途中のコンビニで買った、カップ麺とビール

を流し

込んでから布団に潜り込む。

そんな週末がどのくらい続いただろうか。

あの頃は楽しかった…。

最近、練習場にしていた峠に、何年か振りに走りに出掛けた。

そこは、当時とは様変わりしていた。

センターラインにはポールが埋め込まれ、コーナー手前のアスファルトは

蒲鉾状に波打ち、溜り場だった駐車場はガードレールで封鎖されていた。

超マイナーなこの峠ですらこの有様だ。

他のメジャーな峠の惨状が目に見えかぶ。

今の走り屋や予備軍は、いったいどこを走っているのだろうか。

それとも、もう車でそういう遊びをする連中なんて、居ないのだろうか。

オジサンになった俺は、ただただ残念に思うだけである。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6769g/>

---

【横滑りの無い人生なんて】

2010年11月28日11時22分発行